

04

筒井 潤

Jun TSUTSUI

単語帳

open

英語どころではない。とにかく私は学習能力がない。ベッドに横になって本を読もうとしても3行で眠ってしまう。

私が演劇活動を通じて英語を初めて意識したのは大阪にある小劇場、ウイングフィールドで上演したdracom祭典2001『The dynamics of GUDAGUDA ～ぐだぐだの力学～』¹⁾からである。幕のタイトルや何度となく繰り返される台詞を英訳し、それを大きなモニターに表示した。入場料を払えば誰でも鑑賞できるのであれば、どこの何人が観に来てもおかしくない。だから「公演は世界に開かれている」と、この頃に考えるようになったからである。英語が堪能な知り合いがいなかったのと、自分自身でも英語を少し話せるようになりたかったので、公演の1年ほど前から週に1回英会話教室に通った。勿論その程度の学習で台詞の英訳などできるわけもなく、結局英会話の先生に手伝ってもらった。

その公演後、英会話教室には行かなくなったし、英語字幕も必要でない限りつけていないが、「公演は世界に開かれている」という考えは現在に至るまでずっと頭の片隅に置かれることとなった。

structure

しばらく大阪で燻ったのち、TPAM2009インターナショナルショーケースへの参加が実際に英語が必要となった最初の機会となった。『ハカラズモ』²⁾という作品を完璧な英語字幕付きで上演した。終演直後、TPAMのスタッフから「すぐに行って!」と言われ、よくわからないまま近くのカフェに向かい、海外のフェスティバルの芸術監督とお会した。とにかく緊張したのだが、その緊張は相手の肩書きや佇まいからくるものではなかった。英語に緊張していたのである。簡単な初対面の挨拶さえできない。笑顔は強張るばかり。「上演を観られなかったので、その内容について話してもらえますか?」と訊かれたが、自作ながらもそのややこしい構造を伝える英語力もCV (curriculum vitaeの略、履歴書)の準備もなく、ただただ狼狽するだけだった。芸術監督の通訳をされていた方が救いの手を差し伸べてくださったが、作品の魅力は全く伝わらなかったように思う。

この経験から、フェスティバル/トーキョー 10公募プログラムに参

- 1) 2000年の西鉄バスジャック事件を元に創作された作品。主人公の心の声がナレーターによってずっと語られている中、観光バスツアーに参加する主人公が他のツアー客と馴染めず孤独を募らせ、バスジャックを実行する。
- 2) 2008年北京オリンピック直後に初演。2つのチームが異なる競技をするためにコートに集まって来る不条理劇。上演中、世界の様々なスポーツ憲章が映し出される。TPAM2009では40分の短いバージョンが上演された。

加したときには“満を持して”英語が不可欠な構造となっている『事件母 (JIKEN-BO)』³⁾を創作し、上演した。英語学習が趣味の主人公「母」が教材に従って日本語を英訳していくうちに、その内容が「母」自身が殺害されたエピソードに変容していくという作品。ほぼ全ての台詞が日本語と英語で語られる。上演前に前述の芸術監督が観に来るとの連絡が入った。英語への緊張はまだあるものの、作品の内容は理解されているはずだから会話も弾むに違いない。終演後に再会した。学習した挨拶もできた。バッチリだ。そして作品の話題へと移ったとき、いきなりこう言われた。「あの作品に英語は必要?」……想像以上に公演は世界に開かれていた。

context

惨敗を重ね、もう英語なんて懲り懲り、国内、しかも地元大阪で好きな劇をやってこじんまりと楽しもう、と開き直りかけていた2014年、セゾン文化財団のシニア・フェローとなった。好きにしているだけではいられなくなることを予想し、セゾン文化財団英語ワークショップ Real Artist Conversations (RAC)に参加した。2日間の短期コースだったので語学力は伸びなかったが、そこに集まっていた人たちが英語と格闘する姿を晒し合うという場を経て、英語そのものへの緊張は少なくなった。「みんな同じ悩みを抱えている」というカウンセリング効果である。

いよいよ本格的に英語にどっぷりと浸かる話がきた。音と音楽に関わる表現の可能性を探索するフェスティバル Sound Live Tokyo 2014への参加。カナダの「ほぼ劇団」、Small Wooden Shoe (以下、SWS)とdracomの共同制作、Jacob Zimmerと筒井潤の共同演出による『Antigone Dead People』⁴⁾の上演である。英語が堪能で通訳もできる俳優に客演をしてもらうことで大抵の言葉の問題はクリアできた。おかげで刺激的で充実した創作現場となった。印象に残っているのは、稽古中のJacobの発言に対する私の理解度に日本人俳優たちが甚く感心していたことである。確かに私自身もどうしてわかっているのか謎だった。SWSのみんなと一緒に居酒屋に行ったとき、「とりあえず生!」を訳せなくて「Beer first!」と言って彼らに笑われるような人間だというのに。同じ環境で同じ目標を持って行動している者どうしが思考を交わす空間は言語上だけでなく、文脈にもあることを身をもって知った。

ここまでは全て国内での話である。TPAM2016アジア・アーティスト・インタビュー⁵⁾においてインタビュアーを務めることになり、出不精の私が飛行機で海の向こうまで行かなければならなくなった。行った先々でアーティストやディレクター等に次々と会って交流した。相手が話している内容は十分には理解できなかったが、仕草や表情から伝わる情報の大切さを学んだ。そしてこの頃から次第に日本語

3) ギリシャ悲劇のオレスティア三部作と2007年に少年が母親を殺害した後、「誰でもよかった」と供述した会津若松の事件をモチーフに、家族関係や母親という存在について描いた作品。

4) 既に死んでいる『アンティゴネー』の登場人物たちがその上演を繰り返しているというシニカルな作品。死者が演じているときには録音された音声が使用される演出が、当時dracomが探求していた手法と通じるころがあったことから実現した企画。

5) インタビュイーはフィリピンの演出家JKアニコチェと振付家のドナ・ミランダ。



Sound Live Tokyo 2014 『Antigone Dead People』 photo: 前澤秀登

と通訳を邪魔に感じるようになった。語学力は相変わらず低く、通訳さんがいないと話にならないことばかりなのに。何らかの対応力は身につくつあるものの、それに自身の語学力が付いて来ないことへの苛立ちから生じるこの矛盾。これは現在もある。通訳さんは何も悪くない。悪いのは私だ。

statement

このような活動を続けていくうちに海外のアーティストやディレクターを私に紹介してもらえるようになっていった。1対1の面会も頻繁になった。個人と個人の状況こそ語学力が問われる。この経験からわかったのは、素晴らしい仕事をしている人ほど私のような拙い英語でも粘り強く最後まで聞き、かろうじて伝わる情報に関心を寄せてくれることである。語学力の差はあれど、お互いの理解を隔てる壁の高さはどちら側から見ても同じはず。このようなことに彼らは気づかせてくれた。

ある海外のディレクターと会ったときだ。私が自作について一頻りひとしき話したあとに、「あなたのステイトメントは?」と訊かれた。創作の動機となった具体的な事象やそれに対する私の考えを語り終えるや否や、こう返された。「はい、それはわかりました。で、“あなたの”ステイトメントは?」。つまり私個人がどうして表現活動をしているのか、そしてその活動を通して何がしたいのかといった本質的な問いだったのである。私は完全に不意を突かれ、返事に窮してしまった。長く活動を続けてきたがこのような質問をされたことがなかった。日本語圏では稀な問いかけではないだろうか。私は自身の存在の頼りなき

を思い知った。この出来事はそれまでの活動を省み、自分がどういう創作者で、今後どうありたいのかを考えるきっかけとなった。

vision

2017年10月、dracomはデュッセルドルフでNIPPON PERFORMANCE NIGHTに参加、『今日の判定』⁶⁾で初海外公演を果たした。渡航前の連絡と現地対応はキュレーターの岡本あきこさんが担当してくださったので言葉の問題は全くなかった。初渡航の俳優も安心してパフォーマンスに臨めた。観客にも作品に興味を持ってもらえた。確かに公演は世界に開かれていた。非常に感慨深かった。

私がこのように海外で活動する機会を得られたのは、私の仕事を評価し応援してくださっている方々のおかげであり、感謝の気持ちは言葉では言い尽くせない。一方、私は海外で活動する野望をずっと抱いていたかと言えば実はそうでもない。27年前、演劇活動を始めたばかりの頃は、作品が評価され、地元大阪で注目される存在になり、東京に進出して有名な俳優さんたちと仕事をする、といった双六しか私はイメージできていなかった。演劇の仕事で英語に苦勞するなど夢にも思わなかった。舞台芸術の環境は日々変化している。幸いにも私はその変化による必然として生まれた新しく興味深い企てに誘われることが多く、その都度ただ愚直に挑んできた。今はその結果でしかない。英語の語彙は無学な高校生のときから大して増え

6) 『ハカラズモ』を2020年東京オリンピックを意識して大幅に改訂し発表した作品。架空の奇妙な競技のルールが次第に破綻していく様子が、グローバル社会が生み出した現代の歪みを連想させる。



dracom『今日の判定』Nippon Performance Night 2017ポスト・パフォーマンス・トークの様子

ていない。少ない語彙で何とか凌ぐ対応力(≒度胸)は、与えられた現場で身についたものだ。

dracomのデュッセルドルフ公演のあと、現地ですばらく滞在していたときのことである。ある演劇公演をひとりで観に行ったら、開演前に隣に座った上品なお婆さまから英語で話しかけられた。「どこから来たの?」、「どうして来たの?」、「演出家? 上演したの?」。そして「これドイツ語の上演だけどあなたわかるの?」と問われ、「たぶんわからない。英語もろくに喋れない。もっと勉強しないと」と返事をしたら、彼女にこう言われた。「外国語の勉強はいつになっても大事よ。人を成長させてくれるからね」。確かにそう思う。なんだかんだ言って私はこれまでとても恵まれた環境で活動させてもらってきたので、言葉の通じなさによる深刻な問題にぶつかったことはない。英語での交流は語学力よりも創作に大きな影響を与えた。私の演出センスは

20代から変わっていないと思う。変わったのは、小さなコミュニティでしか通じない独りよがりな劇言語に閉じず、よりopenな上演とするためにstructureとcontextを熟慮し、同時に自身が何者であるかというstatementを常に確認しながら創作するようになった点である。これらの単語の意味は辞書を見て覚えたのではなく、交流の積み重ねで体得した。

これからも絶えず状況は変わっていくだろうし、創作者として私は今後異なる対応力も培っていかなければならないだろう。でもまずは普通に語学力をつけて自分への苛立ちから解放されたい。



筒井潤 (つつい・じゅん)

演出家、劇作家。大阪を拠点とする公演芸術集団dracomのリーダー。2007年京都芸術センター舞台芸術賞受賞。2014~16年度セゾン文化財団シニア・フェロー。dracomとしてTPAM2009インターナショナルショーケース、フェスティバル/トーキョー10、Sound Live Tokyo 2014、NIPPON PERFORMANCE NIGHT (2017年、デュッセルドルフ)等に参加。個人としてDANCE BOX主催『新長田のダンス事情』『滲むライフ』や桃園会、城崎国際アートセンター主催アートツーリズム『Silent Seeing Toyooka』で演出。また、山下残振付作品、マレピトの会、KIKIKIKIKIKI、維新派、akakilike、悪魔のしるしの公演への参加やTPAM2016アジアン・アーティスト・インタビューのインタビュー等、ジャンルや様式を問わない活動を行っている。

<http://dracom-pag.org/>

Real Artist Conversations (RAC):

セゾン文化財団では、舞台芸術界で想定される(これまで日本の関係者が苦勞したり、もどかしい思いをしたりしてきた)場面で必要な要素を盛り込んだカリキュラムの英語ワークショップを2008年より実施。始めた当初*はアーティストを案内役に迎え、4年目からは、ブリティッシュ・カウンシル(アーツ部および英会話スクール)との共催で、教授のプロによる進行と体系だったコースとして運営してきた。英語を使って体を動かしたり、舞台芸術史をテーマにディスカッションをしたりする企画等を同時開催しながら10年。芸術活動において困難にぶつかることは多くあれど、例えば国際交流における「英語」という壁を越えて会話や仕事に発展させられるよう、このワークショップが少しでもきっかけになることを願っている。

*Special thanks to: Christophe Slagmuylder、岡田利規、Yelena Gluzman、Georg Kochi、内野儀、萩原健、姜侖秀、山縣美礼、梅田宏明、参加者の皆さん。

お知らせ▶ RACは年1回ペースで開催しています(例年5~7月目安)。考えや作品について英語で表現することに慣れる・コミュニケーション力向上に重きをおきます。少人数制で、舞台芸術分野で活動するアーティストおよび、制作者を対象としています。関心のある方は今後ご案内を差し上げますので当財団までお問い合わせください。

viewpoint セゾン文化財団ニュースレター第82号

2018年3月31日発行

編集人: 片山正夫

発行所: 公益財団法人セゾン文化財団

〒104-0031 東京都中央区京橋3-12-7 京橋山本ビル4階

Tel: 03-3535-5566 Fax: 03-3535-5565

URL: <http://www.saison.or.jp>

E-mail: foundation@saison.or.jp

●次回発行予定: 2018年6月 ●本ニュースレターをご希望の方は送料(92円)実費負担にてセゾン文化財団までお申し込みください。